

COVID-19 パンデミック下での競技会運営

熊井 司*, 金岡恒治*

2019 年から始まった COVID-19 による未曾有のパンデミックによってスポーツ競技会の運営はさまざまな困難を抱え、競技会の医事運営を担当するメディカルスタッフには安全な運営に向けて多くの課題が課せられてきた。我々のこれまでのパンデミックとの戦いによって得てきた経験と感染症専門家の知識を併せて今後の感染症流行下での競技会運営方法を模索することを目的に本シンポジウムが開催された。

まず東京慈恵会医科大学感染制御科の堀野哲也先生から、感染症専門医の立場から COVID-19 パンデミック下での競技会運営における感染対策と注意点についてご発表いただき、開催地の自治体や医療機関と情報を共有し協力を得て、競技会開催時の観客数の制限の必要性を予め決定して開催する重要性について解説された。

次いで、国際体操連盟のアンチドーピング・医学科学委員長であるしん病院の岩崎安伸先生から、パンデミック開始後の初の国際大会である 2020 Friendship and Solidarity Competition (FSC, 国際体操競技大会) における感染対策が披露された。本大会は 2021 年に延期された Tokyo2020 の開催に向けてパンデミック下において安全に大会を開催するための試金石としても位置付けられ、綿密なガイドラインを策定し、関係施設と連携しながら PCR 検査と隔離の徹底によって無事に開催された。

ラグビートップリーグメディカルコントロール部会員で宮崎大学医学部整形外科の田島卓也先生からは、COVID-19 パンデミック下におけるトップリーグ運営体制について報告された。コンタクト競技であるラグビー競技においても頻回の

PCR 検査と厳密なゾーニング、感染状況に合わせた観客数の設定などの感染対策が披露された。

日本水泳連盟医事委員長で高島平中央総合病院整形外科の元島清香先生からは、Tokyo2020 開催直前の 5 月に開催された飛込ワールドカップ 2021 兼オリンピック最終選考会における感染対策について発表された。本大会では事前の PCR 検査 (LAMP 法) での陰性が確認されたもののみ競技会場に入ることができるバブル方式がとられ、海外選手の入国時検査・隔離体制、宿泊施設のバブル体制、感染発生時の対応などを国際水泳連盟、IOC、内閣官房、スポーツ庁、Tokyo2020 組織委員会、保健所などの関係組織と調整しながら無事に開催されたことが報告された。

日本陸上競技連盟医事委員長で丸紅健康開発センターの山澤文裕先生からは日本陸連において新型コロナウイルス対策本部を設置し、感染防止を図ったうえで、陸上競技大会活動再開の基本方針となるガイダンスを策定し、関係諸団体への説明を行い、競技会を再開させていった過程について解説された。

日本レスリング協会スポーツ医学委員で国立スポーツ科学センタースポーツメディカルセンター整形外科の中嶋耕平先生からは、レスリング競技会開催時の感染対策について報告があり、レスリング選手の海外遠征時の現地での感染症対策の現状や感染発生事例の紹介が行われた。

本シンポジウムで発表されたさまざまな感染対策の集積と各競技団体及び Tokyo2020 組織委員会などの関連諸団体の尽力によって 2021 年に開催された Tokyo2020 大会は大きな問題を起こすことなく開催された。パンデミック対策の必要性によって、スポーツ界におけるメディカルサポートの重要性がより高まり、今後もより安全で公平

* 早稲田大学スポーツ科学学術院

な競技会運営のために医事担当者の協力が不可欠 になると考える.